

多文化共生保育と伝統色彩文化 —日本と韓国の比較を通して—  
 Multicultural Symbolic Childcare and Tradional Color Culture  
 —trough Comparison between Japan and the Republic of Korea—

早川 礎子

HAYAKAWA Motoko

日本ウェルネススポーツ大学留学生別科

〔要約〕 民族の伝統色彩文化とは、自然環境の影響を受けた民族固有の生活様式に深く関わっているもので、これらの造形感覚は、衣食住を中心とした生活文化に多く表れて継承されてきた。日本は四季の変化による自然物(花・葉)の色彩表現が多く、中間色を好む。これに対して、韓国は中国から伝わった色彩表現を図式で自然物の尊厳を現す宇宙観の思想の根底にある陰陽五行思想と儒教を基盤にした色彩で、生活文化の随所に配されている。しかしながら、日本と韓国の生活文化の伝統色彩文化の比較の研究は十分に行われていない。本稿では、日本と韓国の伝統文化教育の継承の先行文献を調査し、文化的差異を認め文化やアイデンティティの多様性の尊重と共存について考えていきたい。

〔キーワード〕 多文化共生保育・伝統色彩文化・五行説・五色・五方色

### 1. はじめに

1990年に入ってから日本では多文化共生保育は、近年、外国人幼児・保護者の受け入れが就学前教育・保育段階でも課題として取り挙げられている。これらの多文化共生保育を行う上で、異文化理解は欠かせない。民族の生活文化は、民族固有の生活様式に深く関わっているもので、自然環境の中で得たこれらの造形感覚は、衣食住を中心とした生活文化として継承されてきたからである。自然環境の中で得た色彩感覚は個人と集団に装飾・伝達・表示等の使用に表れている。

本研究は隣接国の中国の影響を受けた東アジア文化圏に含まれている日本と韓国を対象にして生活環境の伝統色彩の共通点と相違点を見出すことを目的とする。

### 2. 研究目的および方法

日本の先行研究は jstage を用いて「幼児・伝統色彩文化・伝統文化」のキーワードをもとに論文検索を行った。

### 3. 日本の郷土玩具にみる伝統色彩文化

前近代の日本と韓国では五行説の色彩概念と観念が言語を含む生活の全般に影響を及ぼ

してきた。

五行説は紀元前に中国で生まれた自然哲学である。森羅万象全ての要素が「木・火・土・金・水」の五つの要素になると解釈され、その五つの元素は互いに影響を与え合い、相互作用によって天地万物が変化し循環していくという考え方である。陰陽五行説の陰と陽で世界は構成されているという思想である。日本の五色は古墳の壁画・キトラ古墳の四神図・高松古墳(奈良県高市郡明日香村)に観察され、その色彩は青龍の青・朱雀の赤・麒麟の黄・白虎の白・玄武の黒(玄)の五色である。染料や色彩認識の関係で青は緑、黒は紫で表されることが多いので、実際には緑、赤、黄、白、紫になっていることもある。古代より、祭祀に用いられる朱色は日本人にとって特別な色彩であった。縄文時代以降の古代社会では「赤い色」に何らかの特別な意味をもたせてきた形跡がある。これは赤い色には病魔退散や災害厄除けの強い呪術力があるという民間信仰によるものである。郷土玩具には、朱色が多く使用されている。それは赤色が疱瘡という怖い病気を防いでくれるという

信仰をもつ郷土玩具であるからである。赤色の玩具の事例は、青森の金魚ねぶた、青森の人形笛(明るい紫・赤・黄)、福島の子べこ、群馬の山名八幡宮獅子頭、埼玉の鴻巣の赤物、鳥取のはこた人形、香川の高松の奉公さん、群馬のだるま、埼玉の第六天神社の天狗絵馬、岐阜の鳥取の流し雛、大分の福獅子、愛知の鬼祭の鬼面、山口の見島の鬼揚子、愛媛の宇和島の牛鬼、広島の大竹の鯉のぼり、香川の嫁入り人形、鹿児島鹿屋神宮の信仰玩具があるということである(中村, 2020)(注1)。五行には、それぞれ方位・時間・星・臓器・感情・道徳観が当てはめられており、生きる指針とされ、色もその思想のひとつとされている。木は青、火は赤、土は黄、金は白、水は黒の五つの色であり、韓国では五方色と呼ばれていた。

以上の先行文献の検証から、陰陽五行説の五色を受け入れた中で、特に赤に特別な象徴性をもたせてきたことが読み取れる。

韓国の五色は、五方色(オ・バン・セク)と呼ばれて、五方色が満遍なく使われる。韓国語でオは五、バンは部屋、セクは色の意味である。今日、韓国の様々な方面で使われる五方色は、高句麗の古墳壁画にもこの五方色が使われているように、朝鮮半島に住む人々は昔からこの色を多用してきたという歴史的背景があるということである(岡田, 1997)(注2)。

#### 4. 日本と韓国の衣服の伝統色彩文化

自然美を感覚的に取り入れて、感情を色彩に託して表現する色彩文化は平安期より始まる。染色名の似た色は平安時代以前より、大陸からの染料の配合、重ね染め、媒染剤の工夫で微妙な色が造られ、原産地の色とは別な日本の色調に変化した。それは、複雑な深い味の間景色をつくる要因になり、色彩の自由な使用は色数を豊富にさせて、色群を形成し、独特な調和に至った。

日本と韓国の伝統色彩の特徴として無彩色

観がある。古来、日本人は白に清浄無垢、潔白を表し、神事の神聖な色として神代の最高色に位置付けた。平安時代に白と黒は独立したが、その間の無彩色系の色は濃・薄の修飾語で表し、いぶし銀が代表する灰色であった。江戸時代は茶色と鼠色が多く使用され、鼠という表現が無彩色を代表し、中間色は二百以上に拡大している。前近代の日本の葬式では白い装束を着用している。日本書紀や隋書「倭国伝」で古代の我が国の葬儀では故人の親族も参列者も白い喪服を着用するのが通例であった。平安時代後期に宮中の貴族は墨染めの喪服礼によって定められたことがあるが、これが一般人にまで浸透することはなかった。有彩色は平安時代の紅染めの濃淡の色相の増加は階層性の属性に利用されていた。彩度では高彩度の赤色と紫色と黄色は最高色であった。朝鮮王朝時代の民衆は白い服を着る傾向があった。古来、韓国の服色は伝統的に白を基調としてきた。その理由は当初は染料の入手困難、染色に費用がかかる等の経済的事実から、葛や麻で作った布をそのまま着用していた。後代には祭祀時の服装や喪服の影響から白が慣習化されたこともある。韓国の白色観は自然との同化概念が基本にある。素材の着色表現よりも無色に脱色した白で材質本来の素白である。灰色の使用例は少なく、黒は階級服の一部と帽子のような派手すぎる色として扱われ、灰色の僧服、喪服は麻の素色である。2024年2月『壬寅進宴図のなかの朝鮮王室の踊りと音楽』駐日韓国文化院で展示された作品の中には、1902年の朝鮮時代の儀式の様子が描かれている。そこでは、前時代の王の装束が赤色から黄色に変わっていた。当時、衣生活の服飾制度は形態、文様、色彩、織物の種類等は身分で制定された。中国の服飾制に従う色彩で階級は上流階級の権威、官制の身分を定めた彩度の高い色は貴族階級に限定された。しかし、平常服は白色が主であった。儀式服も五行の色彩で構成さ

れた。そこでは濃い色は貴族階級、薄い色は庶民の儀礼服に着用されたということである(白淑子・鈴木信康, 1999)(注3)。

韓服(ハンボク)とは、韓国人が着てきた固有の服の総称(男性用:パジチョゴリ, 女性用:チマチョゴリ, 子供用:セクトンチョゴリ)で、一般的に李朝朝鮮時代の服飾を受け継いだもので、現在でも、結婚式(注4)、還暦等の通過儀礼や国際的な行事の折に着用されているということである(ペ・ヒョンジュ, 2007)(注5)。韓国服の場合は文様が占める美的要素は比較的軽く、洋服と同じように、その色とデザインが重視される。つまり、色彩の配色バランスが衣服の美の基準であったことが窺われる。しかし、今日見られる多くの色彩を用いた衣服の後世になって出現している(ペ・ヒョンジュ 2007)(注6)。

色物の衣服を着用する場合は、上下同色と上下別色の二通りがある。上下同色に用いられる色は、白・黒・灰色・鼠色などに限られるが、上下別色の場合も、子供服以外三色以上を用いることは少ない。また、上下の配色については、特に規定や忌避はない。この組み合わせは、男女、年齢によって異なるが、また、それぞれの地方によっても特色のある組み合わせが行われている。しかし、原則的には対色組み合わせが主で、同系色の組み合わせは極めて稀である。すなわち、赤に緑、黄と紫、粉紅と玉色という反対組み合わせや、黄に赤、赤に青、橙に紫紺という対比組み合わせが多い。服色組み合わせの最も代表的な例は、婚礼時の新婦の衣装で、これは上が黄、下が赤と定められている。

日本の気候は大部分の地域が温帯に属し、四季の区別が明確であり、夏と冬の気候が異なっている。韓国の気候は大陸性気候で、韓国北部に位置するソウルは大陸性気候での影響が強く、寒暖の差が大きい。南部の釜山、済州島は、温暖な気候である。その気候は日本のように四季はあるが、夏が暑く、冬が寒

く、春と秋が短い。移行する春と秋が短いために季節感の差が激しく、四季の植物等の色彩変化も急激であることが観察される。この自然環境にある色彩の彩度の高い対照性が韓国人の色彩感覚に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

原色を多用した韓服であるチョゴリの上に重ねて着る上着の服であるマゴシやチマチョゴリ、女性が韓服のチョゴリやコルム(チョゴリとトゥルマキの前身ごろの両側にかかって前を整えるようになっている日本の紐のことで洋服のボタンと同じ働き)がある。

お正月は、着物は全て新しいもので整える。お正月のために新調し、お正月にはじめて着る晴れ着をソルビムという。この装束の着用方法については、韓国の絵本作家ペ・ヒョンジュによって書かれている『ソルビムーお正月の晴れ着(男の子編)(女の子編)』の二冊が詳しい(ペ・ヒョンジュ, 2007)(注7)。

絵本の中に次の台詞がある。

「衣装だんすのとびらをあけて、ソルピムをとりだすんだ。オンマ(お母さんの幼児語)がぬってくれたあたらしい服だよ。ボゾン  
パジ チョゴリ ペジャ カチトゥルマキ  
チョンボク。」

ソルビムはお正月の晴れ着のことである。ボゾンは足袋、パジは民族衣装の上着、ペジャはチョゴリの上に着る袖なしの短衣、カチトゥルマキは袖がセットン(無病長寿を祈念する赤、青、黄、白の五色をいうが、現在では様々な模様のことを指す)、チョンボクはトゥルマキの上に重ねて着る袖なしの上着のことをいう。カチトゥルマキには5つの色が使われている。女兒と男児では、色使いが少し異なる。女兒のカチトゥルマキは襟とコルムを紅色、または紫色にし、ム(チョゴリやトゥルマキの脇の下部分にあてる布)は藍色にする。男児は襟とコルムを藍色にし、ムを紫色にする(内田直子・小林茂雄・長倉康彦, 2002)(注8)。イ・オクベによって描かれた

『ソリちゃんのチュンソク』にも、子どもがセットンチョゴリを着用しているイ・オクベ、2000) (注 9)。チュンソクは旧暦 8 月 15 日、9 月の中旬の収穫が始まる時期にあたる。韓国の人々は陰陽五行説に基づいて伝統衣服である韓服に五方色を入れて着ることが多くあった。悪い気を防いで無病長寿を願い、初めて迎える誕生日や名節に 7 歳までの子供が身につけた五方色の入ったセットンチョゴリを着せるのは、韓服に五方色を取り入れた代表的な例である。この衣装は、朝鮮時代後期に、初誕生日や伝統的祝日に男児および女児が着用した。今日でも、その伝統は生活に継承されているということである(李照周・植田憲・宮崎清、2007) (注 10)。この子どもに着せるセットン(色動)は、いろいろな色の布を繋ぎ合わせて作る上着をセットンチョゴリという。チョゴリのセットンの色は水・火・鉄・土・木など、宇宙を形成している元素を意味しており、いろいろな色が織りなす色調のようにものごとが調和し着る人が平安であることを願う気持ちが込められている。セットンとは「色を全て入れた」を省略した言葉だが、この「色」とは五方色を指す。五方色の全てを使ったセットンを子どもに着せることで、その子の無病息災と災厄防止を祈願した(杉本正年、1982) (注 11)。

## 5. 日本と韓国の食文化の伝統色彩

次に日本と韓国の食文化について検証していきたい。

2013 年、日本の家庭料理はユネスコ無形文化財に登録された。一般家庭料理では一汁三菜(ご飯・汁物・おかず)が基本とされた。

日本の食文化は「花紅葉」は四季の花を盛り、季節の変化で多様な色彩、紋様、形態の器を選ぶ。目で味わう情緒が飲食習慣に定着している。韓国の食文化は伝統色彩の使用は五行思想の定めで、三白(白ご飯・大根・白沸)であり、食事は灰色調で白餅、お菓子等も陰陽五行に従う食習慣もあった。淡い灰色調であ

る食は朝鮮時代に確立した。韓国人からの聴き取り調査によればキムチチゲなどの汁をスプーンで白米にかける行為は礼儀がないことと韓国では見られている。白米は白米そのまままで食べなければならない。料理にとっても五方色は重要な概念で五色を上手く調和させることが基本とされ、それを一番典型的に表しているのが宮中料理の九節板である。九節板という料理は、周囲に 8 つのマスト、中央の 1 つのマスを合わせて 9 つのマストでできている木器に、それぞれ季節や好みに合わせたおかずを彩りも考えながら盛った料理で、様々な五方色が均等に使われている。

2024 年 1 月に千葉県佐倉市に住む在日韓国人の家庭料理を長男の嫁として韓国人の姑から継承した I さんから聴き取り調査した時、チェサという儀式には、奇数のマストに盛られた料理を作ると話していた。調理例として「ほうれん草・大根・胡瓜・もやし・ゼンマイ」等の野菜が盛られると話していた。この場合、必ずしも五方色の色彩で食材が盛られることはないと話していた。五味五色は薬食同源と考えられ、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされている。たくさんの品数の料理を揃える韓定食や色とりどりの具をのせるビビンパにも五味五色が表されている(銀城康子、2007) (注 12)。祝宴等の時、韓国ではククスの上に乗せる五色の飾り食材は、食に五方色を使った例である。赤色はニンジン・赤トウガラシ、白色はハクサイ・ダイコン・卵の白身、緑色はホウレンソウ・キュウリ・ピーマン、黒色はシイタケ・ノリ・ワカメ・肉と分かれている。ご飯、その上のナムル・肉・薬味等の色彩が五方色を表している。金・内山・岡田・松本(2012)の研究結果によると韓国料理は和物や汁物が多く、日本では煮物、焼物が多いと指摘されている。調味については、おかずは韓国、日本ともに塩、しょうゆに加えて砂糖などの甘味料が多く使われている。

これに対して、韓国では、ごま油の使用頻度が高く、日本ではみりん、酒、だしを使用する点に特徴がある。ここから、韓国では食材の色彩を鮮やかに維持できる調理方法であることが読み取れる(金廷恩・内山幸子・岡田薫・松本仲子、2012)(注13)。

以上まとめると、五味五色は薬食同源と考えられているため、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされていることがわかった。そして、韓国料理では五色の食材の色が鮮明に表される工夫をごま油で和える調理という方法でなされていることがわかった。

ここでも、色彩を五色で用いることが重視されていることが窺われる。

## 6. 日本と韓国の住の伝統色彩文化

韓国の伝統的建築である韓屋と宮廷の建築の彩色である青丹の色彩の象徴性についてみていきたい。

伝統家屋の色彩は素材の調和で木材、畳、和紙が主材料で韓国の住居と似ている。狭い空間を多様な目的で活用するため、色彩調節を必要として色彩統一に中間色調の調和を取り入れ、部分に朱、黒色をアクセント効果に使用した。自然との一体感の雰囲気を満たし、陰影のある調整を大切にしたい。

先史時代、神に祭祀を執り、または祭壇を飾るために始まった丹青は神秘感を与えて邪気を追い出す辟邪の意味と、威厳と権威を表している。

丹青とは、鉱物から探し出した東洋特有の青・赤・黄・白・黒の五つの色を主に使用し、様々な模様や絵を描き入れる技法を指す。狭い意味では主に建築物を採食する場合を指し、広い意味では仏画を描き、荘厳具などの器物を彩色することまで含む。

丹青は三国時代から盛んに使用されており、また五行思想が込められた丹青には現世の康寧と来世の祈願が込められている。

丹青のほか、醤油瓶に赤唐辛子を入れてしめ縄を巻くこと、赤い輝きを出す黄土で家を

建てること、新年に赤い「プジョク(お礼)」を描いて貼ること、宮廷・寺院等の丹青、古墳壁画などの建築物、さらに工芸品でも五方色が使われているのを簡単に見つけることができる。

王宮・寺院には丹青の装飾が施されている。それは青・赤・黄・白・黒を満遍なく使い、文様を描いている。三国時代より盛んに使われ、威厳を示しあらゆる方向から邪気を追い出し、現世の安寧と来世への祈願を表している。

ヒンセクとは白の意味である。ヒンは形容詞ヒダの五幹「ヒ」がセク(色)を就職するために変化した接続形である。ヒダの五幹

「ヒ」は太陽を意味する。これは太陽または日の光を白色と認識したことに由来する。白(2005)は、韓国の白色観は、自然と同化概念が基本にある。素材の着色表現よりも無色に脱色した白で材質本来の素材である白への愛着は生活様式に深く浸透していると指摘している。

丹青で建築物を造る場合には壁面や天井だけではなく、柱頭、垂木、軒などにも彩色するのが主に木造建築物にもよく使われ、特に宮廷や寺院のような権威ある建物に多くみられる。

装飾効果のためだけではなく、国家権力を権威づけたり、宗教的な建物、彫刻、什器などを一般物と区別して厳粛にする目的もある。また、宗教的目的の丹青は来世のような信仰世界を象徴的な模様を通して表現するということである(金貞均、2015)(注14)。

一般の伝統家屋における色彩は無加工の自然材質色の木造の柱、天井は韓紙を貼り、オンドルの床は韓紙を敷き、茶系で明るい室内の保持を行った。壁は木製家具の暗褐色調と強い対比を醸す。室内は茶系の彩調で屋外の自然に同化した弱対比で安定感を保持し、アクセントは座布団の赤、青、黄色による。

## 結論

韓国では衣食住文化にある五方色は五色を均等配分し、動的な印象を表現としている。

五方色には、各々の色彩の象徴性を有していた。そして、その五方色が使用されている韓服とは、直線と曲線の調和を通じて美を創り出す伝統衣装であり、その配色は多くは対比色であることが明らかになった。また、護身の象徴性を含む子供の衣装については五方色が袖部分に満遍なく使用されていることが明らかになった。住文化においても、寺院の建築にのみ五方色は満遍なく使用されていることが明らかになった。食文化については、五味五色は薬食同源と考えられているため、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされ、和える調理方法で食材の五方色を保っていることが明らかになった。

本稿では日本と韓国の生活文化の伝統色彩の先行文献を調査し、その象徴的意味について検討してきた。その結果、色相では赤が中心である日本に対して、韓国は五色が中心であった。日本の五色が赤を中心としていることに対して、韓国の五方色は、特別な祭事のみ使用されるのではなく、衣食住の伝統文化全般に満遍なく使用されていることが明らかになった。

以上、文化を比較してきたように本稿は多文化共生教育へと繋がる調査・研究の途中経過報告であり、今後、この研究の成果を教育に反映していきたい。

## 注

- 1) 中村浩(2020)『疫病退散! 入手先・由来・ご利益がすべてわかる全国厄除け郷土玩具』, 誠文堂新光社
- 2) 岡田浩樹(1997), 「白と原色のレトリック—韓民族の伝統としてのチマ・チョゴリ」 繊維製品消費科学第 38 巻 6 号, p287  
赤や青のチマは、女性の最後を飾る衣装として葬式に用いられる場合が多く、赤のチマは

子供用であった。

- 3) 白淑子・鈴木信康(1999)「日本・韓国の色彩に関する比較研究 衣を巡る伝統色と若者達の官能調査から」九州産業大学芸術学部研究報告第 30 巻, pp131-138
- 4) 頬に赤色の化粧をし、五方色に包まれて無敵状態で嫁入りするのが伝統的な姿である。
- 5) ペ・ヒョンジュ・絵文(2007), ピョン・キジャ訳『ソルビム-お正月の晴れ着-』セーラー出版
- 6) ペ・ヒョンジュ・絵文(2007), ピョン・キジャ訳『ソルビム-お正月の晴れ着-』セーラー出版
- 7) 同著
- 8) 内田直子・小林茂雄・長倉康彦(2002), 「日本女性と韓国女性の服装における場違い感の比較」繊維機械学会誌 55 巻 6 号, p69
- 9) イ・オクベ 絵と文 みせけい訳(2000)『ソリちゃんのチュンソク』セーラー出版
- 10) 李照周・植田憲・宮崎清(2007)『『朝鮮裁縫全書』と楊甲兆にみる「針仕事: バジル」』, デザイン学研究 53 巻 6
- 11) 杉本正年『韓国の服飾—服飾からみた日・韓比較文化論』文化出版局, 1982 年, p109
- 12) 銀城康子文・いずみなほ, 星桂介絵(2007), 『絵本 世界の食事 [3] 韓国のごはん』農文協, p33
- 13) 金廷恩・内山幸子・岡田薫・松本仲子(2012), 「料理本をもとにした韓国料理と日本料理の比較」日本食生活学会誌 23 巻 1 号, p18
- 14) 金貞均(2015), 「住まいの日韓比較考察—かたちから見た住まいの異文化理解」第 58 回日本家庭科教育学会例会セミナー研究発表要旨集
- 15) 崔宣珠・孟令強・渡辺定夫(1990), 「韓国における歴史的環境とその保存制度の運用実態について」第 25 回日本都市計画学会学術研究論文集 25 巻, p447